

小林秀雄全集

第五卷

小林秀雄全集

第五卷

創元社

小林秀雄全集

第五卷

檢印廢止

昭和二十五年九月一日 初版印刷
昭和二十五年九月一〇日 初版發行

定價 二〇〇圓

著者 小林秀雄

發行者 東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
矢部良策

印刷者 東京都千代田區飯田町一ノ二三
中内佐光

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
(大阪市北區橋上町四五)
發行所 株式會社 創元社

電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

驗印刷・鉛木製本

萬一落了乱了本が有りましたら取替へます。

目次

ドストエフスキイの生活

序(歴史について).....	三
一 處女作まで.....	一四
二 ペトラシエフスキイ事件.....	三〇
三 死人の家.....	四〇
四 セミパラチンスク.....	五五
五 「ヴレエミヤ」編輯者.....	六六
六 戀 愛.....	八二
七 結婚 賭博.....	一〇六
八 ネチャアエフ事件.....	一二〇
九 作家の日記.....	一三六
十 死.....	一五九

ド
ス
ト
エ
フ
ス
キ
イ
の
生
活

「病者の光學（見地）から、一段と健全な概念や價値を見て、又再び逆に、豊富な生命の充溢と自信とからゾカダン本能の窈やかな働きを見下すといふこと——これは私の最も長い練習、私に特有の經驗であつて、若し私が、何事かに於て大家になつたとすれば、それはその點に於てであつた」

——ニイチェ「この人を見よ」——

序（歴史について）

1

例へば、かういふ言葉がある。「最後に、土くれが少しばかり、頭の上にばら撒かれ、凡ては永久に過ぎ去る」と。當り前な事だと僕等は言ふ。だが、誰かは、それを確かバスカルの「レ・パンセ」のなかにある文句だ、と言ふだらう。當り前な事を當り前の人間が語つても始まらないと見える。バスカルは當り前の事を言ふのに色々非凡な工夫を凝したに違ひない。そして確かに僕等は、彼の非凡な工夫に驚いてゐるので、彼の語る當り前な眞理に今更驚いてゐるのではない。驚いても始まらぬと肝に銘じてゐるからだ。處で、又、バスカルがどんな工夫を廻らさうと、彼の工夫などには全く關係なく、凡ては永久に過ぎ去るといふ事は何か驚くべき事ではないのだらうか。

言葉を曖昧にしてゐるわけではない。歴史の問題は、まさしくかういふ人間の置かれた曖昧な事態のうちに生じ、これを抜け出る事が出来ずにゐるやうに思はれる。

2

凡ては永久に過ぎ去る。誰もこれを疑ふ事は出来ないが、疑ふ振りをする事は出来る。いや何一つ過ぎ去るものはない積りでゐる事が、取りも直さず僕等が生きてゐる事だとも言へる。積りでゐるので本當はさうではない。歴史はこの積りから生れた。過ぎ去るものを、僕等は捕へて置かうと希つた。そしてこの亂暴な希ひが、さう巧く成功しな

い事は見易い理である。

例へば、僕等はパスカルの言葉を保存した。眞理としてではなく歴史として。眞理としても保存されてゐる様に見えるが、それは僕等が保存しようとして希つた結果ではない。言はば獨りでに残つたのだ。單に自然は依然として過ぎ去る事を止めないからである。

自然は人間には關係なく在るものだが、人間が作り出さなければ歴史はない。歴史は人間とともに始まり人間とともに終る、と言はれるが、この事は徹底して考へる必要がある。

有史以來とか有史以前とか言ふが、一體そこに本質的な區別が在るのだらうか。だが、かういふ質問自体がかなり拙劣なものである。地球上に人類が現れた事が、自然にとつて一偶然事に過ぎないならば、自然は、人間の手で付けられた様々な痕跡を、例へば氷河の付けた痕跡とか、貝殻のつけた痕跡とかを區別する術を知らないに相違ない。地球が人類その他の生物を乗せてゐるのも暫くの間だ。その暫くの爲に、自然が、その機制を變へるとは誰も考へやしない。さういふ自然の世界に、自然科学的精神といふ人間の一能力が對應する。そしてこの一能力は、その純粹な形に於ては、出来るだけ人間臭を脱した「自然常數」の確立を目指さざるを得ない事は言ふ迄もない。この言はば人間が自ら嚴密な一尺度と化する能力は、自然が僕等に強ひたのかも知れぬ。限りなく擴り、限りなく打續く、眺めてゐる限り取り付く島もない様に見える自然に對し、僕等が取つた自己防衛の精鍊された一手段である。だが、歴史は僕等に何を強ひるのか、若し僕等が作らなければ歴史はないならば。

自然は疑ひもなく僕等の外部に在る。少くとも、自然とは、これを一對象として僕等の精神から切離さなければ考へられないある物だ。だが、歴史が僕等の外部に在るといふ事が言へるだらうか。僕等は史料のない處に歴史を認め得ない。そして史料とは、その在るが儘の姿では、悉く物質である。それは人間によつて蒙つた自然の傷に過ぎず、

傷たる限り、自然とは、別様の運命を辿り得ない。自然は傷を癒さうとするのに人間の手を借りやしない。岩石が風化を受ける様に、史料は絶えず湮滅してゐる。湮滅が人間の手で早められるとすれば、それは自然にとつて勿怪の幸に過ぎまい。さういふ在るが儘の史料といふものが、自然としてしか在り様がないならば、其處に自然ではなく歴史を讀むのは、無論僕等の能力如何にだけ關係する。そしてこの能力は、史料といふ言葉を發明した能力と同一である他はあるまい。この能力には史料を自然の破片として感ずる事が出来ないのである。それなら、史料を自然の破片と觀するもう一つの能力に對する或能力があるわけで、古寺の瓦を手にする人間は、その重さを積る一方、そこに人間の姿を想ひ描く二重人なのである。

この二つの能力は、つまり人間を自然化しようとする能力と自然を人間化しようとする能力は、僕等の裡で、成る程離し難く混合してゐるが、假りに、と言ふのはこの文章の技術上、こゝに區別して考へて見てゐるわけだが、この二つは全く逆の方向に働いてゐるばかりではなく、その性質も似てゐない。それぞれの性質を誇張してみればよい。自然は僕等に疏遠になればなる程、僕等の理解に好都合な世界として現れる。別言すれば、僕等は外物による檢證の段階を踏み、眞理とは何物かを知らないとしても、少くとも檢證に堪へない物は除き得る眞理の世界を、自然に對應させるに至る。この世界の支へは言葉ではないのだ。

だが、これに反し、自然を人間化する能力は、言はば生き物が生き物を求める欲望に根ざす、本質的に饜味な力である。無論これは非合理的な力であり、自然は元來人間化なぞに應ずるものではない。従つて人間化された自然とは、その純粹な形では、神話に他ならず、言ひ換へれば僕等の言葉に支へられた世界である。

歴史は神話である。史料の物質性によつて多かれ少かれ限定を受けざるを得ない神話だ。歴史は歴史といふ言葉に支へられた世界であつて、歴史といふ存在が、それを支へてゐるのではない。凡そ存在するものは、人間もその一部

として、僕等は自然としか考へ得ないのだし、自然を人間化する僕等の能力は、言はば存在しないものに關する能力であり、史料とはこの能力が自ら感ずる自然の抵抗に他ならない。抵抗さへ感じなければ、この能力には何でも可能だ。例へば僕等は織田信長の友人だつたらと想像するのと同じ氣樂さで、若し氷河時代に生れてゐたらと想像する。望むならば天地開闢の仕事に立會ふ事も出来る。實際かういふ想像力の働かない處では、歴史はその形骸を曝すだけである。

外物の檢證によつて次第に眞理の世界を築いて行く能力にとつては、自然への屈従こそ、その絶對の條件なのだ、言ひ換へれば、自然への屈従によつて、自然の認識はその純粹を期するのであるが、歴史の認識はどうしても純粹な姿を取り得ない。言はば歴史を觀察する條件は、又これを創り出す條件に他ならぬといふ様な不安定な場所で、僕等は歴史といふ言葉を發明する。生き物が生き物を求める欲求は、自然の姿が明らかになるにつれて、到る處で史料といふ抵抗物に出會ふわけだが、欲求の力は、抵抗物に單純に屈従してはゐない。この力にとつて、外物の檢證は、歴史の世界を創つて行く上で、消極的な條件に過ぎないので、どんなに史料が豊富になつても、その網の目のなかで僕等の想像力は、どこまでも自由であらうとするだらう。

僕等の日常の生命が、いつも外物の抵抗を感じて生きてゐる限り、歴史にあつても同じ事だ。既に土に化した人々を蘇生させたいといふ僕等の希ひと、彼等が自然の裡に遺した足跡との間に微妙な均合ひが出来上る。この均合ひのなかで行はれる仕事に、歴史常數といふもの（さういふ言葉が使へるなら）を發見することは覺えない。歴史とは何か、といふ簡單な質問に對して、人々があればどう様な史觀で武装せざるを得ない所以である。

歴史は繰り返す、とは歴史家の好む比喩だが、一度起つて了つた事は、二度と取返しが付かない、とは僕等が肝に銘じて承知してゐるところである。それだからこそ、僕等は過去を惜むのだ。歴史は人類の巨大な恨みに似てゐる。若し同じ出来事が、再び繰り返される様な事があつたなら、僕等は、思ひ出といふ様な意味深長な言葉を、無論發明し損ねたであらう。後にも先にも唯一回限りといふ出来事が、どんなに深く僕等の不安定な生命に繋がつてゐるかを注意するのはいゝ事だ。愛情も憎悪も尊敬も、いつも唯一無類の相手に憧れる。あらゆる人間に興味を失ふ爲には人間の類型化を押し進めるに如くはない。

どの様に幸福な一日にしたところが、僕等はそれと全く同じ一日を再び生きるに堪へまい。「ウイリアム・ウイilson」は、單なる怪奇小説ではない。ポオの恐怖は萬人の胸底にある。子供を失つた母親に、世の中には同じ様な母親が數限りなくゐたと語つてみても無駄だらう。類例の増加は、寧ろ一事件の比類の無さをいよいよ確めさせるに過ぎまい。掛替へのない一事件が、母親の掛替へのない悲しみに均合つてゐる。彼女の眼が曇つてゐるのだらうか。それなら覺めた眼は何を眺めるか。

自然現象に、繰返しがあるかないかを誰も嚴密には知らぬ。出来事に纏る條件の數の多少により、或る出来事は、一回限りの出来事に見え、或る出来事は繰返される出来事に見えるだけだ。特殊な出来事とはその出来事が成立する爲の條件の數が限りなく多く、従つて、その出来事の平均回歸時間が限りなく長い、さういふ出来事に過ぎない。稀有な事件と月並みな事件との間に、元より本質的には區別はなく、又、總じて事件の非可逆性といふものに就いても、これを確率的に論證する以外に、何等嚴密な論證の術も僕等は持たぬ。僕等は嚴密を目指して變味のなかにゐる。

だが、ソクラテスは、再び毒杯を仰がねばならず、信長はいつか又本能寺で死なねばならぬかも知れぬ。さういふ

言葉に一體何の意味があるだらうか。歴史の上で或る出来事が起つたとは、その出来事が、一回限りの全く特殊なものであつたといふ事だ。僕等はそれを少しも疑はぬ。その外的な保證を何處にも求めようとせず、僕等は確實な智慧のなかにゐる。

子供が死んだといふ歴史上の一事件の掛替への無さを、母親に保證するものは、彼女の悲しみの他はあるまい。どの様な場合でも、人間の理智は、物事の掛替への無さといふものに就いては、爲す處を知らないからである。悲しみが深まれば深まるほど、子供の顔は明らかに見えて来る。恐らく生きてゐた時よりも明かに。愛兒のさゝやかな遺品を前にして、母親の心に、この時何事が起るかを仔細に考へれば、さういふ日常の経験の裡に、歴史に關する僕等の根本の智慧を讀取るだらう。それは歴史事實に關する根本の認識といふよりも寧ろ根本の技術だ。其處で、僕等は與へられた歴史事實を見てゐるのではなく、與へられた史料をきつかけとして、歴史事實を創つてゐるのだから。この様な智慧にとつて、歴史事實とは客觀的なものでもなければ、主觀的なものでもない。この様な智慧は、認識論的には曖昧だが、行爲として、僕等が生きてゐるのと同様に確實である。

歴史上の客觀的事實といふ言葉の濫用は、僕等の日常経験のうちにある歴史に關する智慧から、知らず識らずのうちに、僕等を引離し、客觀的歴史の世界といふ一種異様な世界を徘徊させる。だが一見何も彼も明瞭なこの世界は、實は客觀的といふ言葉の輕信或は過信の上に築かれてゐるに過ぎない。客觀的といふ言葉が、極めて簡單な歴史事實も覆ふに足りない事を、僕等は日常経験によつてよく知つてゐ乍ら、どうして、限らない歴史事實の集り流れる客觀的な歴史世界といふ様なものを信ずるに至るのであらうか。きつかけは恐らく、疑ひやうもなく客觀的な自然といふものに衝突せずに、そこに何等かの刻印を遺さずに、歴史は現れる事も出来ず、進行する事も出来ないといふ事情が與へるのである。言はば歴史といふ河が、自然の上に彫らざるを得ない河床に、歴史といふ生き物が、自然の上に投

げざるを得ない影に、客觀的といふ言葉が纏ひ付き、影によつて實物が類推されるのだ。この無邪氣な類推が歴史的存在といふ概念を生む。唯物史觀といふ擬科學の土臺である。

歴史は決して繰返しはしない。ただどうにかして歴史から科學を作り上げようとする人間の一種の欲望が、歴史が繰返して呉れたらどんなに好都合だらうかと望むに過ぎぬ。そして望むところを得たと信ずるのは人間の常である。

4

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり」と芭蕉は言つた。恐らくこれは比喩ではない。僕等は歴史といふものを發明するともに僕等に親しい時間といふものも發明せざるを得なかつたのだとしたら、行きかふ年も亦旅人である事に、別に不思議はないのである。僕等の發明した時間は生き物だ。僕等はこれを殺す事も出来、生がす事も出来る。過去と言ひ未來と言ひ、僕等には思ひ出と希望との異名に過ぎず、この生活感情の言はば對稱的な二方向を支へるものは、僕等の時間を發明した僕等自身の生に他ならず、それを瞬間と呼んでいゝかどうかさへ僕等は知らぬ。従つてそれは「永遠の現在」とさへ思はれて、この奇妙な場所に、僕等は未來への希望に準じて過去を蘇らす。

放心してゐる時の時間は早く、期待してゐる時の時間は長い、さういふ簡単な僕等の日常經驗にも既に時間といふものの謎は溢れてゐるのであつて、心理的錯覺といふ様なものでは到底説明が付かぬ。錯覺に陥入るまいとすれば、僕等には放心も期待も不可能となるだらう。錯覺があるとすれば、放心や期待そのものが錯覺であらう。だが、この錯覺が疑ひもなく確實な處に、時間の發明者たる僕等の時間に關する智慧がある。同様に、過去に生きる或は未來に生きるといふ言葉は單なる比喩であらうか。若し比喩に過ぎないなら、僕等の思ひ出や希望そのものが比喩であら

僕は本質的に現在である僕等の諸能力を用ひて、二度と返らぬ過去を、現在のうちに呼覚ます、而もこの呼覚まされたものが、現在ではない事も亦よく知つてゐる。かういふ矛盾に充ちた仕事を、僕等は何の苦もなくやつてのける。僕等が自分達の發明にかゝる時間のうちにゐる限り、其處に何等疑はしいものに出會ふ事はない。謎のなかにゐる者にとつて謎はない。それが人間の世界である。

だが、残念乍ら、この内的には飽く迄確實な世界は、自然といふも一つの世界に取巻かれてゐる。何者が僕等を驅つて、人間の世界をさまよひ出させ、自然の顔に面接しなければならぬ様な處にまで、追ひ詰めるのか。それとも僕等は追ひ詰められたのではなく、進んでそれをやつたのか。誰も知らぬ。いづれにせよ、僕等はさまよひ出るのであつて、それは、言はば、眞理を攔む筋道はまことに曖昧だが、眞理は確實に攔んでゐる、さういふ世界を出て、眞理探究の筋道だけが極めて明瞭であれば、眞理を決して手に入れる必要のないも一つの世界に這入る事である。

さまよひ出た處で、時間は忽ち面貌を變へるであらう。自然の時間は僕等の手で創られたものではない。それは空間の三次元に結び付いた第四次元の時間として現れざるを得ないだらうし、僕等にはそれをどう變へようもない。僕等は、理智といふ小窓を開けて、手を拱いてゐるだけだ。僕等にはそれを理解する以外に何事も出来ないからである。僕等は小窓を覗き、そこに客觀的な眞理を見付け出す。尤も眞理が見付かつたといふより寧ろ小窓の工夫によつて自然に對し正確に質問したと言つた方がいゝ。

第四次元といふ言葉は名目に過ぎぬ。それは例へばカルディヤの天文學者にも臨んだ同じ時間以外のものを指さぬ。さういふ少くとも人間の側からは、相手の懐に飛込む爲の通路が何一つない様な時間を前にして、何を置いても先づ行爲者たる人間が、自分の行爲とともに生き死にする自分の發明した時間に還らざるを得ないのは當然だ。

日時計の時間が、若干の自然常數を單位とする時間に移り行くまでに、人間が自然の時間の究明に費した努力は莫大なものであらう。この努力は疑ひもなく自然を人間から出来るだけ疎外する方向を辿つて來た。僕等の側から自然への通路と僕等が見誤るものを出来るだけ取除かうと努力して來た。そして今日僕等は、自然の最も客觀的な正確な姿として、まことに精緻な物理的世界像を前にするに至つたのであるが、僕等は、この像が、依然として巨大なジレンマを孕んでゐる事に氣が付くだらう。次の質問は僕等に必至である。其處で成功してゐるのは、鏡に映つた自然の方なのかそれとも鏡を磨いた人間の方なのか、と。

唯物論者は、自然の方だといふだらうし、觀念論者は人間の方だと言ふであらう。併し、質問の面白さに比べれば、解答などは何物でもない。そしてこの形而上學的質問は、言はば、僕等にはどう手の下し様のない自然の時間之前にして、僕等が止むなく自分達の發明した時間の方へ還らうとする、まさしく其處に現れる他何處に現れ得ようか。この形而上學的質問ほど、僕等の生の不安定を如實に語つてゐるものはない。

この質問が、人間の生の唯中から發せられた事に間違ひはなく、又、この未だ答を得ない質問の裡に、人間のあらゆる能力の萌芽がある事にも間違ひはない様に思はれる。歴史は其處で言はば本來の面目を保つてゐる。歴史哲學にとつて、これがほんの仕事の種子に過ぎないのは當然だとしても、この生々ましい種子から、生々ましい花を開かせる技術は極めて困難な事に思はれる。凡そ形而上學ほど、その企圖に於て現實的な學問もない様であるが、亦、その結果がこれほど人を誤らすものもない。形而上學といふ言葉が、空理空想の意味を帯びるに至つたのは誰の罪によるのだらうか。恐らくこの仕事の困難を困難と思はない者の罪が最大なのである。

歴史といふ言葉は、無論學問が作つた言葉ではない。僕等の生そのものが歴史ならば、歴史哲學の素材は僕等の生に他ならない。そして歴史哲學は、この素材を、自然科学の場合の様に、學的操作に好都合な死物に變ぜず、出来る

だけこの素材の生き物としての困難さを尊重し、其處に意味とか價值とかいふものに關する、言はば自然の必然性より遙かに高次な必然性を究明しようとする。而もこの仕事は、嚴密に理論的な一體系の裡に表現される事を要する。

この様な仕事の崇める女神がミネルヴァであるかミュウズであるかは知らないが、困難さはこの仕事の命であり、容易になつたら仕事は恐らく無意味になるといふ事は確からしい。この種の仕事で一流のものには僕等の日常の生の容易さがそのまま困難さとして刻印されてゐるいふ逆説的な事情が必ず見付かるのであつて、さういふ仕事の眞の說得力は、見様によつて難解とも見え容易とも見える様なその學問的方法とか形式とかに決してあるのではない、さういふものの背後に、この仕事の素材の肉體的な困難さが、輕率な讀者の眼を掠めて生かされてゐる處にある。

従つて次の事はどんなに逆説めて聞えようと眞實である。偉大な思想ほど亡び易い、と。亡びないものが、どうして蘇生する事が出来るか。亞流思想は亡び易いのではない。それは生れ出もしないのである。歴史の食糧はやはり歴史である。嘗て一番微妙に生きて死んだ歴史が、一番上等な食糧である事に間違ひはない。

5

ドストエフスキイといふ歴史的人物を、蘇生させようとするに際して、僕は何等格別な野心を抱いてゐない。この素材によつて自分を語らうとは思はない、所詮自分といふものを離れられないものなら、自分を語らうとする事は、餘計なといふより寧ろ有害な空想に過ぎぬ。無論在つたがまゝの彼の姿を再現しようとは思はぬ、それは痴呆の希ひである。

僕は一定の方法に従つて歴史を書かうとは思はぬ。過去が生き生きと蘇る時、人間は自分の裡の互に異なる或は互に矛盾するあらゆる能力を一杯に使つてゐる事を、日常の経験が教へてゐるからである。あらゆる史料は生きてゐた人